
明日見る未来

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

明日見る未来

【Nコード】

N0136B

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

自殺を考える女の子をとめる男の子。楽しさを知っていく女の子が少しずつ変わり始める学園ラブコメ。

夜の空に光る星の数々。

もうきれいだとも思えない。

「あたしもあそこの仲間に入れるのかしら」

星を見て微笑しながら言う。

あたし、もうこの世から消えます。

マンションの屋上から下を見下ろす。

ここから落ちれば確実に死ねる。

「・・・ばいばい」

目をつぶった。

「ちょっと待った!!!!!!!!!!!!!!」

あたしの腕を掴む手。

「なっなに?!」

「お前こそなにしてんだよ!!!!」

「死のうとしてただけだけど。それがなにか?」

「なにか?じゃねえよっ」

そう言っつてその男の子はあたしを屋上の真ん中へと引っ張っていつ

た。

「ちよつとっ・・・邪魔しないでよ！」

せつかく勇気出したのに・・・
せつかくもうここにいなくて済むのに！

「なんで死のうなんて考えたんだ？」

「別に関係ないでしょ」

「ほんとは死にたくないだろ」

「なっ・・・」

「だってお前泣いてるじゃん」

目に手をやると、確かに涙が流れてた。
全然気づかなかった。

「これから死ぬ人間が涙なんか出せつかよ」

そんなことない。

だってあたし、いたくないもの・・・

居場所がないもの。

「・・・あたしもう死ぬしかないのよ」

「なんで？」

そしてあたしは黙り込む。

しばらくして男の子が口を開いた。

「あんた小早川愛里だろ？」

「なんで知って・・・」

「有名だからな。金持ちで成績優秀で。模試もいつもトップクラスなんだろ」

「・・・」

「言えよ、言いたいこと」

なんでこの人はあたしを助けるの。

なんで話を聞こうとしてくれるの。

なんでそんなに優しいの？

あたし、その優しさにもう何年も触れてないの・・・

「・・・うち跡継ぎ争いがひどいの。あたしは本家で今16で女の子。だけど分家には17の男の子がいて・・・」

いつつもとっちが継ぐのかって争いで絶えない日々。

あたしもすっかりしなきゃいけない。

些細なミスさえ許されない。

「この間の模試も成績がずいぶん下がって、そしたらお母さんに言われたの」

『なにこのテストは』

『ごめんなさい・・・でもあたしも頑張って・・・』

『そんなことはどうでも良いのよ』

お母さんが欲しいのは「小早川愛里」じゃない。

「小早川を継ぐあたし」なんだ。

『あなたは跡を継ぐ身なのよ。しっかりしなきゃ困るわ』

『・・・あたしってお母さんのなに？』
『小早川を継ぐ道具よ』

あたしはその日以来人と向き合えなくなった。
学校でも、ちよつとでも成績が下がるとなにかと言われ・・・家で
はもう道具扱い。

楽しいことなんかちつともありやしないの。
別に誰も「あたし自身」を望んでるわけじゃないんだってわかった
とき、ほんとに生きる希望をなくした。

「そっか・・・そんなことがあったんだ」
「わかったでしょ。だからもうあたしに構わないで」
「嫌だ」

どうして？
どうしてあなたはここまでしてくれるの？

「明日も学校来いよ」
「学校なんて行く意味もない」
「ある！俺がお前に会いに毎日学校行く。だからお前も来い」

あたしは小さな声で問う。

「・・・どうしてそこまでしてくれるの？」

そして彼はほほえみながら言うんだ。

「人が人を殺すのにはなにかわけがあるかもしれねえけど、人が人を助けるのにわけはいらないだろ？」

あたし、この笑顔を見て明日も学校へ行こうと思った。

あたしを見てくれる人がいるっていうんなら、行こうって思えた。

みんながみんなお母さんのような人じゃないんだって信じたと思って
思ったんだ。

「小早川さーんっw」

「わっ?！」

「おはよっ」

「・・・ほんとに来た」

可愛くないあたし。

ほんとはもっと喜んで言いたかったのになあ。

「だって約束したっしょ？」

人なつっこい笑顔に惹かれる。

「あれー栄太郎？小早川さんと知り合いなのー?!」

「おうw昨日からお友達になった！」

「変なのーw2人全然タイプ違うのに」

違うタイプ。

「そんなんよりうちらと遊ぼーよ！今日カラオケでも行かない？」

「そうそう、行こうよー」

彼はあたしなんかと一緒にいると変に見られるんだ。

ギャル系の女の子たちとのほうが釣り合ってるってわけね。

・・・ん？

待てよ、栄太郎って言った？

もしかして松沢栄太郎・・・とか？

あの問題児って言われてる。

「だーめ！今日の放課後は小早川さんと出かけるからW」

「はっ?!」

「ね☆」

そういつて彼は教室から出ていった。

・・・本気で言ってるの？

まさか・・・ね。

そして放課後になった。

「さて・・・帰るか」

荷物を持って教室を出た。

「あっ小早川さん！今行こうとしてたんだぜー」

「松沢くん。悪いけどあたし・・・」

「良いからはやくっ!!」

松沢くんはあたしの手を引っ張って走った。

向かった先は喫茶店だった。

「なに？ここ・・・」

「俺の今ブームな店なんだよね。どうしても小早川さんに食わせた
いもんがあって」

「え？」

彼はウェイターになにやらオーダーしていた。

食べさせたいものってなんだろう・・・変なもんじゃないよね？

数分後、注文したものがきた。

「わ！スペシャルフルーツパフェー！！」

苺やメロン、クリームにアイスたっぷりでチョコソースまでかかっ
てる甘いパフェだった。

「うまいだろ？」

「うんw」

「やっと笑ったな」

彼もパフェを食べ始める。

「どうしても小早川さんに元気になってほしくて」

あたしのために？

嘘・・・

「俺先生からしたら問題児だしこんなんだけど、でも学校は好きな

んだ。だから小早川さんも学校好きになってくれたら嬉しいな」

またあの笑顔。

「・・・松沢くんがいたら好きになるかもね」

あたしは聞こえない声でボソツと言った。

「え？なに？」

「ううん、なんでもw」

あたし明日も学校行く。

そしたらまたこんな風に松沢くんと話とかできたりするんだろうな。

「愛里最近松沢栄太郎と仲良いよねー」

「え、そう？」

あの日から何日も過ぎた。

松沢くんは毎日のようにあたしのところへきてくれるんだ。

そして楽しいこととかおもしろいところ教えてくれるの。

あたしが笑うように。

「やめなよーあんな人と付き合うの」

「なんで？」

「だって問題児よ？優等生の愛里には合わないよ」

なんでそんなこと言うの？

じゃああたしが問題児か、彼が優等生だったら良かったってこと？

でもそれじゃだめなの。

だって、だってそれじゃあ・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・松沢！！」

廊下で叫ぶ先生の声。

あたしは教室を出る。

「そんなことして良いと思ってるのか?! お前っ」

「は? ちげえよ」

先生ともめてる松沢くんがいた。

「ま、松沢くんっ」

「小早川さん」

「どうしたの?」

あたしは松沢くんに駆け寄って聞いた。

松沢くんがなにか言う前に、先生の言葉が耳に入った。

「ふん、ちょうど良い、小早川。お前最近こいつとつるんでるようだな」

「・・・・・・・・それがなにか?」

「お前みたいな優秀な生徒が問題児とつるむなんて問題だろう。もっと人材を考えたほうが良いぞ」

「!！」

ひどいっ・・・

松沢くんのことなにもわかってないくせにそんなこと言うなんて。

「先生こそ見る目あるんですか？」

「なに？」

「松沢くんの良いとこなにも見ようとしないで問題児だなんて言っ
て・・・あたしに大切なことを教えてくれた彼はすごく立派です！」

あたしの声はますます大きくなる。

「・・・あたし彼がいるから学校にきてるんです！彼がいない学校
だったらとっくにいなくなってます!！」

「小早川さ・・・」

だって、今ほんとに学校が楽しいって思えるもの。

松沢くんがいるから学校へ行こうって思えるの。

「・・・まあいい。なにはともあれ松沢がテストの答案用紙盗んだ
ことに変わりはないからな」

「えっ・・・」

あたしは松沢くんのほうを見た。

「違うってんだろ!! 人の話をちゃんと聞けよ!!!」

「教師に向かってその言葉使いはなんだ!」

そしてまた2人はもめ始める。

答案用紙が先生の手からひらりと落ちた。
まわりにいる生徒がそれを拾う。

「あのー、お取り込み中悪いんすけどこれ3年の答案っすよ。1年の栄太郎には関係ないんじゃないと思うんすけどー」

その瞬間シンとなった。

「ほんとに?!」

「だから違うって言っただろ。なんだよー信じてなかったのか?」

「んー・・・微妙?」

「なんだそれーw」

そうだよね、松沢くんがそんなことするわけない。
あたしそんなことちゃんとわかってるのに。

「す、すまん・・・松沢」

「あー・・・」

彼はちらつとあたしの方を見て、言った。

「もう良いっすよ」

これにて騒ぎはおさまった。
みんな自分の教室へと帰っていった。

残ったのはあたしと松沢くんだけになった。

「ありがとう」

「え?」

「俺小早川さんがいなかったら殴ってたかもしれない」

彼は頭を手をおきながら言った。

「俺さ、前まではちよつとしたことでも簡単にキレる奴で・・・だからあいつ（教師）が疑うのも無理ないんだ。だけど小早川さんに出会ってから俺少しずつそんなことがなくなってきたんだ」

そしてまた笑う。

「あたしも、さっき言った通り学校楽しいの。それって松沢くんのおかげなの」

家で少しくらい嫌なことがあっても、学校きたら忘れられるの。

松沢くんの笑顔見たらあたしも嬉しくなる。

松沢くんがいなかったら、あたしもうこの世にいなかった。

「・・・あの日助けたのは偶然だけど、でも小早川さんを笑わせたって思ったのはずっと前からなんだ」

「え」

「たまに見かけてもさ、いつも笑ってないからいつか俺が笑わせたってずっと思ってた。まさか一緒のマンションだったとはねーw」
「ほんと、すごい偶然w」

偶然が重なって起きた現実。

偶然のおかげで変わった未来。

「これからもずっとあたしの側で笑ってほしい。松沢くん」

明日は違う未来が待ってるかもしれないってこと、教えてくれたから。

笑えることの楽しさを知ったから。

「俺・・・こんなだけ良いの？」

「そんな松沢くんだからあたしたち出会ったんだよ」

優等生のあたしと問題児の彼。

そうだからこそ出会えた。

強くなる勇気を、もらったの。

明日の未来と一緒に見ていくために。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0136b/>

明日見る未来

2010年10月11日01時13分発行